により、外科医の相談する頻度も高くなり、その治療成績も急速に向かっていった。

国立札幌病院外科においても昭和45年から47年の3年間に3例の症例を経験した。いずれも、Treitz筋帯直上部の十二指腸閉鎖であり、3例共、結腸後順動十二指腸空腸側吻合術を行った。このうち2例は、術後調査良好であり、現在両症例とも3歳で、健康に発育している。しかし、1例は、術後12日に縫合不全で死亡した。低体重未満児であったこと、腸閉鎖が複雑であったことが、死亡の間接的要因と考えられる。救命の現在の状態も加えて、若干の考察を加えて報告した。

14. 1才10か月の女児に発生した穿通性十二指腸潰瘍の一治験

新里順慶，大泉和夫，新川順康（北摂目病院外科）
外岡正人（同小児科）

症例：1才10か月女児、主訴、嘔吐、血便
昭和48年12月15日下痢後出現し某小児科医にて急性消化不良として治療16日タール便回復となり17日当院小児科転医。止血剤使用等で経過観察するも下血は止まず、21日胃バリウム造影の結果、十二指腸閉鎖の変形を認め、治癒を施行、潰瘍は穿通性で大便中のものであった。潰瘍部は切除困難のため、縫合止血を行いビルロート法で胃腸吻合を行った。本症例の標的2歳未満の十二指腸潰瘍は比較的稀である。成因的には二次性のものに属するものと考えられる。又小児潰瘍は一般に保存的療法に良く反応し、治癒傾向が強いといわれているが、本症例の標的性潰瘍を呈したものは、手術的療法以外、救命の道はないものと思われる。以上最近我々の経験した例を中心にして、小児潰瘍の成因、頻度、診断等について若干の文献的考察を加えて検討してみた。

15. 小腸多発穿孔の2例

赤坂嘉宣、伊藤 慎、佐藤正彦、今村文彦
佐藤文男、内野茂一（北摂目第一外科）

小児の消化管穿孔は、原因及び治療の面で問題の多い疾患であり、とりわけ小腸穿孔は比較的稀ではあるが、死亡率は70%以上と高い。12ヶ月、女、C.B.A。の診断で肝部空腸穿孔後、10日目より腹部膨満みられ、開腹して腸管に2個の穿孔部を証明、腸切除を行なった。術後2月で再び腹部膨満再発、再手術で前回の吻合部より5cm肛門側に1個の穿孔があり、腸管造影、現在経過観察中。病理学的に腸節層の欠損がみられた。

(2) 5歳、男、急性リンパ性白血病で入院治療中、プ
レドニゾロン20mg投与後、腹部膨満出現。観察すると、Treitz筋帯よりの全小腸に米粒大50枚数の穿孔部がある、全小腸と上行結腸の一部を切除した。病理的に穿孔部Steroidによる穿孔と判断された。以上の2例を報告し、合わせて記載の明らかな最近10年間の本邦症例について若干の検討を加えた。

16. 肝門部肝十二指腸吻合を行い1年2か月生存を得た
先天性肝門部閉鎖症の剖検例の検討

工藤正純、手戸一郎、東野長哲、安村俊一
後藤洋一、高杉信男、長谷川正義
（市立札幌病院第一外科）

先天性肝門部閉鎖症の吻合不全型に対し、肝門部肝十二指腸吻合を行ない、1年2か月生存した症例を剖検する機会を得た。

術中肝門部に肝管を認めなかったにもかかわらず、十二指腸は短い1mmの孔で肝内胆管と交通していた。しかし本症例は良好な胆汁流出はあったものの、術後7か月後より上行感染を頻発した。剖検時の肝は高度に纖維化し、胆管の増生を示す肝硬変であり、十二指腸と肝門部交通部では肝管は上皮脱落し、炎症性肉芽組織に置きかえられ、胆管炎、胆管周囲炎が高度で、胆管内は濃縮せる胆汁が充満していた。

われわれは過去5年間に先天性肝門部閉鎖症の吻合可能型1例、不能型2例を経験している。不能型3例に対し肝門部肝空腸Roux-Y吻合を行なったが、上行感染によりすべてを失っており、今回肝十二指腸吻合を行ったがこれも同じ転帰をとった。早朝手術と共に上行感染防止のための術式の確立が望まれる。

17. Hernia into the umbilical cord の2例

高橋憲基、塩野恵夫、山田 隆、斎藤敬成
林 勝（市立旭川病院外科）

市立旭川病院外科において、1969年以降経験した脐帯ヘルニア症例は、6例である。内2例は、腸管の腹腔内還納異常に因するとされているHernia into the umbilical cordであった。2症例とも満期正常分娩成熟児であり、三色核膜法施行後に、1期的に根治手術を施行し、治癒をみた。1例は、膣壁欠損4.0×4.0cm、病変のヘルニア内に歯帯は、被膜の中央に位置し、脱出器器は、小腸であったが脱出との明着、小腸合併奇形は認められなかった。1例は、膣壁欠損口2.7×2.7cm、有茎型で、cord は、Hernia sac の中央に位置し、脱出器器